第 11 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会

日時：令和５年５月 30 日（火）
18 時～19 時 30 分
会場：長野県伊那合同庁舎　講堂

次 第

１ 開　会

２ 挨　拶

３ 会議事項

（１）第 10 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ

（２）上伊那農業高等学校内　伊那養護学校高等部　中の原分教室の実践

（３）学校像のイメージ（素々案）について

（４）意見交換

４ その他

次回（第 12 回）の予定

【日時】　令和５年６月 19 日（月）　18：00～19：30

【会場】　ニシザワいなっせホール（伊那市生涯学習センター６階）

【内容】　新校の学びのイメージについての意見交換

５ 閉　会

資料１

第 10 回　上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ（案）

日時・会場	令和５年（2023 年）５月２日　18 時 00 分～19 時 30 分　長野県伊那合同庁舎講堂
出欠席	懇話会構成員：出席者 30 名、欠席者４名（山下政隆、鈴木正志、城取　誠、小林敏明） 事務局：県教委３名（中島主幹指導主事、田中主任指導主事、宮崎主事） 辰野高校３名、箕輪進修高校２名、上伊那農業高校４名、駒ヶ根工業高校３名
傍聴者	傍聴２名、報道４社
会議事項	（１）第９回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ （２）校地検討会議について　（３）育てる生徒像、目指す学校像について （４）懇話会でのご意見に対する検討の方向性について　（５）今後のスケジュールについて
当日資料	第 10 回懇話会（資料）、意見交換シート

主な内容（意見及び発言等）

（１）第９回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ（事務局より説明）
〇第９回懇話会での意見交換の主な意見・発言の確認。グループ討議で出された意見の確認。
（２）校地検討会議について（笠原部会長より説明）
〇第３回（3/24）の内容：校地見学会（1/24）の報告。どちらの校地になっても、不足する実習設備については整備すること。懇話会での学びの具体的なイメージの議論を経て新校の校地の検討をするため、会議はしばらく休止。
〇第４回（5/2）の内容：資料の訂正箇所、上伊那農業高校の農地に関する追加資料の確認。今後の検討の見通しに対する意見交換。
（３）育てる生徒像、目指す学校像について（事務局より説明）
〇表現の修正箇所の説明。懇話会としては、提案された育てる生徒像、目指す学校像の方向性を確認。
（４）懇話会でのご意見に対する検討の方向性について（事務局より説明）
〇あり方・方向性について事務局の考え方を示し、さらに意見交換したい点（下記の項目参考）について整理。
（５）今後のスケジュールについて
〇今回の懇話会の位置付け、検討の見通しについて説明。

意見交換（グループ内で下記の３項目について意見交換。その後発表）
〇上伊那総合技術新校で必要な学びの分野について
・土木建築は、職人も現場代理人も行政側も不足している。地域で育てる学びがあってもいい。
・卒業後、地元産業界で活躍できるかどうかが大切である。
・選択肢が多すぎるのもどうかと思う。教員の確保は可能なのか、中学生のニーズがあるかどうかが心配である。
・多様な生徒が生き生きと学ぶことができる分野と言える根拠は何か。生徒が学びたいというのが検討の方向性である。高校生に聞いてみたい。
・農工商のブレンドは実際にできるのか。融合や連携を大切にしたい。化学反応がおきることが必要。観光分野では農工商の化学反応が期待できる。
・中学生が目標を持って入学してくるのか。自分探しの時期であり、自己肯定感を育てるのが大切。
・25 単位の縛りついて、学科でブレンドしてはどうか。農工商の何を学んだのかは関係ない。学び方を学ぶ、探究を大切にする。
〇国際交流について
・言葉のやりとりだけでなく、他国との産業交流を目的とすればよい。上伊那の８市町村がそれぞれ実施している交流は活かせる。
・信大農学部の留学生などとの交流。JICA などを通じた留学生との交流会などはすでに実施されている。
・専門性を高めると国際交流は必要となってくる。英語教育は必須である。
〇県外からの募集及び受け入れ態勢について
・ここにしかない学びが必要。受け入れ体制作り（寮、里親制、ホームステイ、下宿などアイディア）が必要。
・県外からも期待される内容があることが必要。総合技術新校にしかない良さを広めないと、他県の生徒は来ない。
・上伊那の生徒に学んでほしい。

今後の検討事項

◎新校の学びのイメージの素案を示し、意見交換していく。

その他

【次回】　日時：令和５年（2023 年）５月 30 日（火）　18：00～19：30　場所：長野県伊那合同庁舎　講堂
内容：新校の学びのイメージ（素案）について

資料２

第10回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会（R５．５．２）グループ討議記録
（意見交換シート記述も含む）

○上伊那総合技術新校で必要な学びの分野について　＊国際交流について
◇県外からの募集及び受け入れ態勢について　・その他の意見として

グループで出た意見	
A	○土木建築の職人教育は必要、資格所有者が少ない。管理する行政の側も資格所有者が少ない。技術専門校が工科短大になったため、職人、資格所有者が不足。 ○繊維は、バイオテクノロジーのきっかけとしてよい。 ○観光については、白馬高校が有名だから、上伊那にも力を発揮できる場を作る ○その他に、社会のインフラなども学べる学科、金融リテラシーの分野が考えられる。自己肯定感を高めること、学び方を教える学校づくりが必要 ○目指す学校像に示されている「地域・社会のみらいを創造できる学校」に鑑み、地域のインフラを支える人材は重要。一方、様々な課題もあり、教育委員会における検討に期待する。 ○地域の声を聞きながら、丁寧な検討が必要。 ○化学反応がおきることが必要。 ＊言葉のやりとりだけでなく、他国との産業交流を目的とすればよい。語学力は必要となる。 ＊今後、交流は必要。（将来的には必要） ◇新学科ができればそれを新校の売りにできる。 ◇新学科は難しい。 ◇魅力ある学校を目指す中、寮の整備などの受け入れ態勢について検討することは、選択肢として重要。 ◇可能なら実施。 ・“ウェルビーイング”第４次長野県教育振興基本計画の目指す姿、キーワードである。わかりにくければ説明を加えみんなに理解してもらうべきである。（言い換えるべきではない）
B	○上伊那をベースというならば、基幹産業を主力とすべき。教員は確保できるのか？ ○生徒のニーズがどれくらいあるのかわからないが、土木建築関係の企業は常に人材不足の状況なので地域にとっては必要な学科であると思えます。大学でも繊維学部で残っているは信大のみで現在も感性工学など学部名とかなり離れたものになっているので時代とズレがあると感じます。例えば県外から生徒を募集するとなると、このような学科は必要だと思います。調理を学べる高校は県内では私立高校しかなく生徒も魅力に感じるのではないかと思います。 ○分野を拡大して行く事は良いと思うが、教員、生徒共に必要があるかと心配。 ○多様な文化が学べる？どのくらいのニーズがあるか？（生徒・先生）高校卒業したあとのレベルで通用するのか？専門学校へ行けばいいのではないか？高校ならではの学びがいいのでは、音楽・芸術、沢山失敗できる環境。 ○多様な生徒が生き生きと学ぶことができる分野と言える根拠は何か。高校が生き生きと学ぶことができる高校について「土木・建築・繊維・観光」だと高校生が生き生きと学ぶことができるだろうという大人目線の考えを見つめていくことが大切だと思いました。高校生にとって魅力ある学科とは何か？聞いてみたいですね。 ○コース学習、選択の中で学んでいける総合的な学習の時間の中で発展させる。課題研究の中で、外部講師をお願いする。必ずしも教える、教えられる教員が必要かどうか。上農ではそれぞれのコースで学んでいる内容がここにある。 ○高校卒業後、専門学校で、観光や建築について学ぶことができるが、専門より深い学びは可能か。高校で学ばず、専門学校で学べばよいのではと考える生徒がせるのでは？ ＊留学制度は、高校の特徴とする。 ＊例えば信大農学部の留学生などとの交流ができればいいのではないかと思います。（いきなり留学などは費用面などでもハードルが高い。） ＊留学制度を取り入れることが必要、体験することが必要だと思う。 ＊留学・オンライン ＊「1年半は、ニュージーランドで生活します」くらいの大胆な発想だと生徒も喜びますね。 ＊現在も実際に行っている、学校、教育内容からも可能である。 ＊外部機関との連携で… ＊辰野高校のコースでも、国際交流をしたが、言葉のかべは大きい。英語を学び、何を質問するかの準備が必要。 ◇上伊那以外、県内・県外から受け入れは体制作りが必要。（寮整備など） ◇県外からの募集を考えると少しとがった学科は必要だと思います。白馬高校もそうですが、募集するとなると寮の設備は必要。そのために地元自治体や関係団体との連絡が必要。全国の生徒が学びたいと思うような魅力的な学び（学科）が必要。 ◇県外へ行く生徒もいるので県外からも募集することは重要。 ◇県外から来た方の視点や観光は大事。（美しいと思うものが違う。）長野県上伊那に来たときに上伊那のことを知っていけるシステム。（歴史なども知れば、町や食や人の見方がガラッと変わってくる）移住、定住の先輩方の意見や気持ちが聞けたりする機会があるといい（地域の中で自分が暮らしていいると思える安心感）

資料２

	◇高校のみならず、小中高と学びのつながりで学びたい子どもたちを受け入れる。地域を学び、土地で学ぶということは、地域の人たちから教わる。一緒に体験する実習することが良いと思う。 ◇県外からの募集ときくと、部活動の推薦がパッと思い浮かぶが、部活動への力の入れ具合で県外からくる生徒は増えると思う。中学生に振り向いてもらうために、どういったことをするか？他県の中学生にチラシをくばる？ネットを使って広める？総合技術新校にしかない良さを広めないと、他県の生徒は来てくれない。
C	○土木・建築の一般知識を身に着けさせることは必要である。コース制として用意してよいのではないか。 ○土木・建築と観光分野の接続が考えられないか。 ○繊維は岡谷を中心としたイメージがあり上伊那のイメージがない。 ○繊維はバイオテクノロジーの分野を学習させたい。（高校生にはレベルが高いかもしれないが） ○観光はキーワードになるのではないか。農業分野でも連携できる。 ○学科にできなくても「学び」は必要である。 ○民泊で田舎を楽しむ発想がある。 ○高校生が地域経済を考えるなどの宿泊プラン観光プランを考える。（白馬高校で実践例あり） ○観光分野では農工商の化学反応が期待できる。 ○土木・建築よりも繊維・観光分野のほうがイメージしやすい。 ○金融教育も必要である。 ＊JICA などを通じた留学生との交流会などがすでに実施されている。今後、交換留学などが考えられないか。 ＊英語教育は必須である。 ◇信州大学は県外からの学生が多い。新校も県外からも期待される内容があることが必要である。 ◇県外から受け入れるため寮、里親制、ホームステイ、下宿などアイディアが必要。
D	○土木系はあるといいのでは。 ○地域振興となる学科が必要。 ○経営という視点で学ぶのがよいのでは。 ○融合や連携は大事。中学生が入学してからの選択肢があるとよい。 ○挙げてある専門にかかわらず、連携をさらに進めた融合の考え方は challenging ですが、その価値はあると考えます。一方で、応募があっての学校なので、第一に優先すべきは中学生、保護者、中学の先生に対し、いかに魅力的に見せるかではないでしょうか。 ○浅く広く学ぶコース、深く高めるコースに分け、同居できる学校は可能か。地域の企業がつながれる体制はおもしろい。未来の地域を支えてくださる青年の育ちがほしい。総合学科的要素もあってよい。その中で力をつける。 ○土木の分野を組み込んでほしい。 ○学科を一定数として、連携・融合できる仕組みを作る。 ○農業・商業・工業が基本かも？ ○上伊那地域の産業振興となる新校になってほしい。地域特性から工業・農業・商業のバランスのとれたところ。それぞれの共通として学ぶ切り口として「経営」という視点はどうか。地元企業の社長さんたちからも経営についての話を聞いてもよい。 ○土木・建築は県内でも少ない学科だから県内で学べることができたら来たい人も多いかも。観光はどのコースでも観光にはつなげているから分野として分ける必要はないかも。 ○土木・建築・繊維は農業科の中での学びに入れていけないか検討してほしい。担当できる教員がいない。 ○土木・建築は必要な職種。観光は総合技術新校と関係ない。 ＊「国際＝語学」という観念ではなく、日本以外の国々で行われている農・工・商を体験できる機会があればよりよいのではないでしょうか。 ＊広い視野が必要である。 ＊１５～１８歳の子どもにハイブリッドというすべての経験は無理。スペシャリストを育て、社会に出て通用。進学での単位が目的ではない。 ＊姉妹校との交流とかみたいにリモートとかでも少しでも自分たちと違う文化を持つ人と交流できるのはすごく刺激的。 ＊工業の専門高校生の不得意分野な子が多いが、技術進歩学習には必要性が高い。外国の工業高校はよく日本に来ている。 ◇上伊那の高校だから上伊那の子供対象。 ◇県外からの募集はよいと思う。その場合、卒業すれば地元に帰ってしまう。なので地域にこだわらず、どこの県に行っても通じる人作りを考えた方がよいかも。 ◇最初は県内だけの募集がいい。まだ県外の人が興味が出るような内容かどうか不明。 ◇農業や地域からすると、受け入れることができるのなら。 ◇全国にどこでもある学校であれば、その必要がない。

資料３

上伊那総合技術新校　懇話会でのご意見に対する検討の方向性について

	これまでの懇話会での意見	あり方・方向性
目指す学校像・	○自分の興味関心を深め、好きを探究することができる学校 ○小・中学校での探究を引き続き取り組める学校	◇「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求できる探究活動の実践
	○障がいを持つ方も含めた、多様な人が来たくなる、来やすい学校 ○ジェンダーレスの学校	◇多様性を認め、学校関係者の well-being（幸せな状態）を実現
	○地域に根付き、社会で活躍する人を育成する学校	◇地域は上伊那に限定するのでなく、地元の発展を担う人も含め、広い地域で活躍できる人を育成
	○農・工・商の連携により、化学反応が起こる学校	◇学科の枠を越えた、農・工・商の学びの展開
	○人間性（協調性、積極性）を高めることができる学校	◇他者との協働を積極的に展開
	○体験型の学びを実践する学校	◇学校内外で学ぶ仕組みを構築
	○育てる生徒像と目指す学校像のリンクや主語を確認してほしい ○カタカナやわかりにくい表現を少なくする ○みらいをデザイン、みらいとはなにか	◇中学生やその保護者にわかるような表現にする ◇将来をデザインできる生徒をイメージしている ◇自らの人生と今後さらに急速に変化する社会を想定
	“ウェルビーイング”は言い換えるべきではないのではないか	◇よりよい表現となるよう検討
育てる生徒像	○社会性を持つ生徒の育成 ○他者と協働できる生徒の育成 ○周囲の人々と協力しながら社会を創っていこうとする生徒の育成 ○主体的に行動でき、コミュニケーション力や表現力を持つ生徒の育成 ○周囲の人々と協力しながら社会を創っていこうとする生徒の育成 ○リーダーとして活躍できる生徒の育成	◇農・工・商・情報の活用等の学びや特別活動を通じて育てる
	○専門分野の枠を越えた職業能力を持った生徒の育成	◇農・工・商・情報の融合の学びで実現
	○データ活用ができる生徒の育成	◇情報技術はすべての生徒が身に付けられるようにするまた、特化して学べるようカリキュラムの工夫を検討
	○幅広い視野を持った生徒の育成	◇学科の専門性にとらわれない学びの仕組みの研究
	○専門的・基本的な知識・技能を身に付けた生徒の育成	◇基礎的な学び（コア）とより専門性を高めたり、幅広い技術を身に付ける学び（オプション）を用意
	○自己肯定感を高められる生徒の育成 ○人間性の高い生徒の育成	◇農・工・商の学びや特別活動を通じて育てる ◇知識偏重でなく、体験から学ぶことができる機会を準備
	○起業できる生徒の育成	◇起業教育（アントレプレナー教育）の展開を検討
	○育てる生徒像を読んでも、「総合技術新校」の学校像の特長がない	◇学校の外部環境や内部環境の客観的特長や事実の強み、それらを活用、発揮した活動によって生徒への教育成果が伝わるよう検討

資料３

	これまでの懇話会での意見	あり方・方向性
新校での学び（設置学科）等	○総合技術学科（仮称）のような、ひとまとめの学科	◇総合技術高校では、専門性を担保するために、農業科、工業科、商業科の設置を構想している
	○情報関連の科目がトレンド ○情報系学科の設置	◇すべての生徒が情報技術を身に付けられるカリキュラムを工夫していく ◇工業科に、情報技術系の学びを設置けることを検討
	○土木系・建築系の学びの設置	◇学びの中に位置付けることを検討
	○農・工・商をブレンドした学科	◇農工商、共通な学びを検討
	○３学科融合がピンとこない ○融合した学びであっても、どこに軸足を置くかが大切 ○新学科⇒融合の学びが何になるか答えがない	◇学校とともに、今後さらに検討していく
	○電気系を電子系と電力系の２つに分ける ○機械、電気、情報、蓄電池や半導体関連を学ぶことができる学科	◇コースや科目の設置を検討
	○起業家学科、アントレプレナー学科の導入	◇コースや科目の設置を検討
	○各々の学科がつながり、連携をとる横断的な学びが必要	◇学科間の連携や融合は、総合技術高校のコンセプトの根幹
	○体験的学習の充実した学び	◇どの学科にも体験を取り入れた学びを展開デュアルシステム等の導入を検討
	○アパレルデザイン、ゲーム・音楽などのデザイン、語学力をつけるような学び	◇地域との連携や外部人材の活用も視野に入れ、検討
	○地域に少ない産業を学べる学科等　土木、建築、繊維、観光関係	◇学びの中に位置付けることを検討
学びを支えるために考えられる取組	○入学後でも、学科を決められる ○科を越えたくくり募集で、入ってから科を選べる仕組み ○個々の希望や興味・関心などによって、様々な授業を選択できるようにする ○１年次は普通科の授業を充実させ、キャリア教育的な時間（農業・工業商業を体験的に学べる）を組込みながら、１年次の後半から、生徒の興味・関心がある学科等の選択を促す	◇専門性の担保と入学する生徒の実態を考慮しつつ検討
	○１、２年生に体験的学習を多く盛り込めるカリキュラムがよい	◇すべての学科にも体験を取り入れた学びの展開を検討
	○コース学習の中で探究的な学びができる教育システムの検討	◇探究的な学びは新校でも重視
	○デュアルシステム等、地元企業と連携した取組み ○スマート農業や自動化に向けた社会のために地域の方と取り組みたい ○地域の企業、商店、農家で実習学習する中で協働して課題解決 ○地域企業、自治体等と連携した地域課題の解決 ○信州大学、南信工科短期大学校などの学術機関との連携 ○地域企業、自治体等と連携した地域課題の解決 ○深い学びのために、地域の企業が入り込む仕組み ○上伊那地域全体での交流に期待 ○今の延長線上で、さらに地域の方々にかかわりを持ってほしい ○地元企業、地域人材にも目を向けた学び	◇専門教育には、地域との連携が必須「共学共創プラットフォーム」を構築し、連携を図る方向

資料３

	これまでの懇話会での意見	あり方・方向性
学びを支えるために考えられる取組	○３科連携した課題研究の実施 ○専門科 25 単位（最低）の上で、連携を図る農・工でものづくり、商で売る ○異分野との交流 ○農工商の科目に触れることは経験を増やすという意味では有意義だと思うが、反面、中途半端になるのではないかという危惧がある	◇総合技術高校では、農、工、商のそれぞれを極める生徒も、幅広く学ぶ生徒もいてよいと考えており、個々の生徒の希望がかなう仕組みの検討 ◇専門性の追求は必須
	○どの科に所属していても、取りたい資格が取れる環境	◇総合技術高校のメリットとして、積極的な環境整備を検討
	○地域とつながるコーディネータの設置が不可欠	◇県教委でもモデル校を設け検討 ◇自治体等とも相談していきたい
	○人気の科は希望者が多いが、人数調整するのでなくできるだけ望んだ学びを保障してほしい	◇現行制度下で可能な方策を検討
	○談話スペースや話し合える場がほしい	◇施設整備については、議会同意後に検討開始改めて意見交換する
	○学びを考えていくために、どのような制限があるか	◇専門学科は、25 単位以上の専門科目の修得が必要 ◇上伊那の各校の特色も踏まえた学びの構築が必要
	○制服に対する意識が中高生を中心に大人が思っている以上に高い ○登校時間を考えてほしい ○クラブ活動にも力を入れてほしい	◇学校運営や生徒会活動、部活動についても順次検討
	○学校に通えなくなりそうな生徒のフォローできる体制	◇生徒の心のケアやインクルーシブ教育等を考慮した学校運営を検討
	○「個別最適な学び」を実現するための教員の確保が必要	◇教員数の確保も必要
	○海外との交流をもっと盛んにしてほしい ○国際交流、留学制度はよい ○言葉の壁（英語等）を越えて、自由に外国とコミュニケーションが取れる環境	◇学びの中に位置付けることを検討 ◇自治体等とも相談していきたい
	○県外からの募集も視野に入れた受け入れ態勢（寮など）の検討	◇新校の魅力を高めるよう検討 ◇自治体等とも相談していきたい
	○一度外に出ても帰ってこられる環境・地域の魅力づくり ○Uターン、残る人を育てる観点 ○地域社会が生徒を縛り付け過ぎない環境を用意してほしい	◇新校づくりをきっかけとして、地域のみなさんと検討していきたい

資料４

上伊那総合技術新校の学校像のイメージ（素々案）

（農業・工業・商業を持つ上伊那総合技術新校を一言で表すキャッチフレーズ）

育てる生徒像

○専門性・社会性や人間力を育み、地域や自分自身のみらいをデザインできるひと
○多様な人々との協働を通して、主体的に行動し、学び続けることができるひと
○幅広い視野や、多様な価値観を持ち、学びを活かして社会に貢献できるひと
○上伊那で学び、地域・社会を元気にすることができるひと

目指す学校像

○生徒が学んだことを活かし、自分自身の将来と地域・社会のみらいを創造できる学校
○上伊那の資源を学びや体験に活かし、協働的な学び、個別最適な学びを通して生徒が成長できる学校
○学科の枠を越えた農・工・商の連携により新たな価値観を創出し、地域・社会に貢献できる学校
○多様な生徒が「いきいき」と生活し、個人や社会の「しあわせ」を実現できる学校

育つ力

◆実習経験を通して、実践的な確かな技術力
◆自主的に課題を発見し、解決策を考える想像力やアイディアを出す力
◆チーム開発に積極的に取り組むことができるコミュニケーション能力
◆社会的な課題に関心を持ち、持続可能な社会を創るための技術を追求する意欲力

工　業 × 商　業 × 農　業

農業・工業・商業の学びを活用・融合させた課題研究

地域ものづくり科（仮称）	地域デザイン科（仮称）
主に工業的な学びを通して、地域創生、地域貢献を果たす。 （学科・コースの例） 機械、電気、情報技術…	主に農業的、商業的な学びを通して、地域創生、地域貢献を果たす。 （学科・コースの例） 野菜、果樹、植物、動物、フード、アグリ、里山、グローカル、マーケティング、流通、会計、まちづくり探究…

学びのプラットフォーム（各科・コースの授業に加えた自由な科目履修）

興味・関心によって、他学科・コースの授業を選択し、専門性を深め、幅を広げる。
○地域で育てたい人材につながる科目（土木、建築、国際交流、繊維、観光等）
○進路（進学、就職）に関する科目　など

学びを支えるシステム

◆ミックスホームルーム　◆デュアルシステム　◆模擬会社の運営
◆幼保小中大や養護学校との交流　◆学校外の学修の単位互換を含む、新たな単位認定

上伊那地域共学共創プラットフォーム

地域連携コーディネータの設置

上伊那広域連合・自治体 | 大学等 | 企業・産業界 | 国際機関 | 特別支援学校